



証 し

神戸ルーテル神学校 90 期生伊藤正春

白血病になってから九年目に入りました。今まで多くの兄弟姉妹の祈りによって支えられ、今日まで来れた事を神に感謝いたします。今は遅れに遅れた神学校の卒業を来年3月に果たせればと卒論などに励んでいます。

これまでの事と現状を以下に整理してみました。

1998年6月、広島市内の企業に勤務していた52歳の時、6月20日過ぎ頃から頸部のリンパがはれ、微熱と身体のけだるさを覚え、やっと立って歩けるような状態のまま、6月29日広島赤十字原爆病院の血液内科を訪れた時の事です。骨髓液の採取があり、緊迫した様子に、何か良くない事が自分の身に起こっている事を悟りました。今まで健康に恵まれ、死にいたる病気なんて他人事で、終生、健康なまま老いて行くものと思っていました。その自分の人生もこれまでかと、ベッドの上で死を覚悟しました。事実、後で聞かされたことですが、病名は急性骨髄性白血病で正常な白血球が殆どゼロに近く、一日来院が遅れていたら命は無かっただろうとのことでした。

広島赤十字原爆病院に1年7ヶ月間入院し、治療によって危ういところを説し、寛解しました。退院から1年半後、2001年4月東京の病院における遺伝子検査の結果、病は遺伝子レベルで完治していると聞かされ、白血病から開放された喜びに満たされました。入院治療生活によって深められた信仰体験を通し、福音を伝えるよう聖霊に導かれ、献身するに至りました。

2002年4月、56歳の時、神戸ルーテル神学校に入学を許されました。病気の事はすっかり忘れ、徹夜で宿題をする事がしばしばあり、夏休みが始まった頃、別のタイプの白血病が再発していることが判明しました。苦しみ抜いた入院生活に二度と戻りたくないと思っていたその病院に、病気は私を引き戻しました。以来四度の再発入院を繰り返しました。

指折り数えれば、九年前の発病以来、通算五回3年3ヵ月入院生活を送り、31クールにおよぶ抗がん剤大量投与がありました。三度目の発病の時、広島赤十字原爆病院の主治医は、他病院へのセカンド・オピニオンを勧め、これ以上の抗がん剤治療は危険と回避しました。そこで骨髓移植先進地の名古屋第一赤十字病院に入院しましたが肺炎を併発しました。抗生剤による治療をしても熱が下がりませんでした。妻と息子と神戸ルーテル神学校校長・橋本昭夫先生の立会いの中、医師から、あと4～5ヶ月の命であることが告げられ、転院を勧められました。自宅から近い三重県の鈴鹿回生病院へ搬送され、無菌室に入ったその晩、不思議にも長く続いた高熱が突然平熱に下がり、やがて真っ白だった肺が一週間後にはきれいに影がなくなっていました。その後、助かるためには、

骨髄移植しかないと言われ、兄弟や息子の骨髄検査をしましたが不適合でした。骨髄バンクで適合者を捜すことも考えられましたが、骨髄移植は私の場合3年以内無病生存率が50パーセント以下であることから結局断念しました。幸いにも病状は化学療法で寛解へと向かい、2005年6月17日に退院できました。

しかし翌2006年7月、原因不明の発疹の合併症を伴う四度目の再発があり、今までのような毒性の強い抗がん剤による化学療法は、心不全を起こす危険性が大きいため、避けられ、毒性の弱い抗がん剤が用いられました。幸いにも3ヵ月後の十月に退院する事ができました。

しかし、退院5ヵ月後の今年2007年3月19日に5度目の発病がありました。もうこれ以上の抗がん剤投与は心不全を起こすと見なされ、入院治療は一切行われず、万策尽きた状況でした。

白血球のガン細胞である骨髄芽球はやがて70～80%前後にまで上昇し、免疫力が低下し肺炎の合併症を起こしました。5月22日に再度入院し、肺炎治療の結果やがて肺炎が消えたところで医師より退院をうながされました。

私は主治医に訴えました。「退院してもすぐ感染症を起こし、病院に戻ってくる事は火を見るより明らかではありませんか。危険は覚悟していますから抗がん剤治療をしてください」。すると医師は「治療すれば良い血球までたいてしまい、正常な血球をもう造り出せない危険性もあり、そうなると確実に死にます」。との答えでした。私の要請を抑えるため、妻にも別室で同じ事を言ったそうです。私にしてみれば、同じ死ぬのであれば、ただ死を待つよりも、戦って死にたい。神様が生死を支配されている。医師であろうと勝手に私の寿命を決め付けたくない、と憤りを感じました。

治療と並行して栄養補給食品を摂って来ましたので、自分自身の自然治癒力、免疫力のアップによって病気を克服する事に期待を繋ぎました。それなりに効果はありましたが、病気の勢いの方が勝っていました。治療の望みも絶たれ、死の危機に立たされました。この世で得た経験、知識、学歴、資格、自分自身の誇り、価値、ありとあらゆる有形無形のもの、自分を助けてくれている医療等、どれ一つ取っても、死を前にしては無力となりました。それらのものは霧と消え、神様の前に示せる価値を何も見出し得ぬ貧しい裸の自分と、ベッドの上で対面するしかありませんでした。

神様は私の志やら何等かの価値に目を留められ、祈りに応え、きっと癒して下さるに違いないとする誤った心の態度に気づかされました。それは神様をさえ人間の欲求を満たす手段とし、人の欲の水準にまで神様を下落させるという私の自己中心的態度のおごりの高見から突き落とされ、今まで持っていた自分に対する価値観は、粉々に砕かれてしまいました。

あわれな貧しい裸同然の私がベッドの上に横たわっていました。「主よ、このしもべを

「憐れんでください」と、憐れみを乞うより他ありませんでした。

すると私の心は軽くなったのです。今までの私は、人に、人だけでなく神様に対しても、よく思われたい、自分をよく見せたい、そういう思いと行いがありました。しかし、そういう思いから開放され自由とされたのです。神の愛は、その対象の価値や魅力によって引き出されたり、左右されたりする愛とは、全く正反対のものです。そんなところで、自分の豊かさを造ろうとしても、また造り上げたとしても、たとえ人間は自分が欲するもの一切を得て、生涯中それを失わない事が確実であっても、時の流れは彼を容赦なく死に運びます。このことは今まで愛し求めてきた一切のものを失う事を意味します。人間は必ず死ぬものであり、根本的に存在する自分の貧しさはどうしようもありません。人の価値はただ神が飾らない裸同然の人を愛するという事実にあるのです。

数日後、婦長を通し、以前主治医であった院長先生に病室まで来ていただき、危険を覚悟して化学治療を受けたいとの私の気持ちを伝えました。その結果治療が行われ、幸いにもガン細胞は目視では見ることが出来ないまでになり、8月31日に退院できました。

病院生活も人生の貴重な一頁であり、死を覚悟したときもまた恵みの時でもありました。

- ・病んだ事により病人の気持ちが分りました。
- ・病んだ事により、主に身を委ね平安を得る幸いを味わいました。
- ・治療の万策が尽きた時、人間のおごりの高見から突き落とされ、謙遜の低みへと下りました。
- ・死の危機に立たされ、信仰とは主に100%委ね切る事だと分りました。
- ・死の危機に立たされ、信じ得ない奇跡を体験できました。
- ・生の限界と思われた先に、主にある希望を見出しました。
- ・病と死の危機を経て、今日一日の命に感謝する思いが深くなりました。

しかし、やがて病院に戻らざるを得ないと覚悟しています。私の場合、傷付いた遺伝子、染色体が癒されない限り、現代医学では完治させる事は出来ないと考えられます。また再発したときは、医師でさえ、どのような対処をしてよいのか判断できかねるでしょうし、私もその場に立たされなければ判断できない事です。先を見通すことの出来ない今は、先の事を考えず今日一日、与えられた命に感謝し、喜び、全てを主に委ねています。

人間生まれたときは不平等でも、死ぬときは皆平等です。この世の富も地位も権力も何一つ死を前にしては無力であり、それを持ってゆくことすらできません。孤独にもたった一人で死んで行くしかないのです。しかし私たちクリスチヤンには、主と共に天の国に住む希望があります。

命について使徒ヨハネは、ヨハネによる福音書で次のように証しをしています。

- ・主イエスは人々に命を与えるためにこの世に来られた（ヨハ3:16）。

- ・主イエスを信じて、その名によって命を得るためです（ヨハ 20 : 31）。
- ・主イエスには「命があった」（ヨハ 5 : 26）。
- ・主イエスは真の神です。甦りと命です（ヨハ 11 : 25）。
- ・主イエスは永遠の命を人々に与えて下さいます（ヨハ 6 : 33）。
- ・主イエスのご自分を命のパンだと言われました（ヨハ 6 : 35）。
- ・主イエスは真の命、永遠の命を与えて下さいます。ご自分の死を通してイエスは世に命を与えます（ヨハ 12 : 24、25）。
- ・「御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。（ヨハ 3 : 36）」とあるように、永遠の命は、主イエスを信じる者に世に生きている時から、この命は始まる、と告げています。

詩篇 23 篇にもありますように、「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたが共にいてくださる」。生と死の全領域に亘って主権と支配を及ぼされる神様の御手に全てを委ねることができる幸せを感じます。神様が、私の心に永遠の想いを植えてくださり、わが主イエス・キリストの栄光の福音のうちに、尽きざる生命の確かな希望と約束を与えて下さいました。これら全てのことを感謝しています。

主にありて

2007年11月09日